

発掘調査現地説明会

京都市文化市民局
文化芸術都市推進室 文化財保護課

1. 石見城跡について

石見城跡は、京都市西京区大原野石見町に広がる周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です。善峰川の南岸にあたり、西から東へ緩やかに下がる扇状地に立地します。

この地域を含む一帯は、室町時代（14世紀後半～16世紀）には「西岡^{にしのおか}」と呼ばれ、「西岡^{にしのおか}被官衆^{ひかかんしゅう}」「西岡中脈^{なかつしじょう}地頭^{じとう}御家人衆^{ごけにんしゅう}」と称される複数の小領主が、連帯して治めていました。彼らは室町幕府の側近と強く結びつくことで、勢力を強めたとされています。

被官衆は、それぞれが治める地域に城や館を築

きました。このうち石見には「石見城」が築かれました。その城主を小野氏とする説がありますが、まだはっきりとは分かっていません。

1467年、応仁・文明の乱が始まると、西岡衆は細川勝元が率いる東軍に属して戦いました。しかし、西軍に味方する武将も現れたため、西岡一帯は激しい戦火にまつまれました。

石見城は、文明元年（1470）に寺戸城主であった野田泰忠（東軍）の攻撃を受け、焼失しました。小野氏は長享元年（1487）の九条家書状や西迎寺に残された伝承によりその後も存続したと考えられますが、石見城が復興されたかどうかはわかっていません。



図1 調査位置と周辺の遺跡

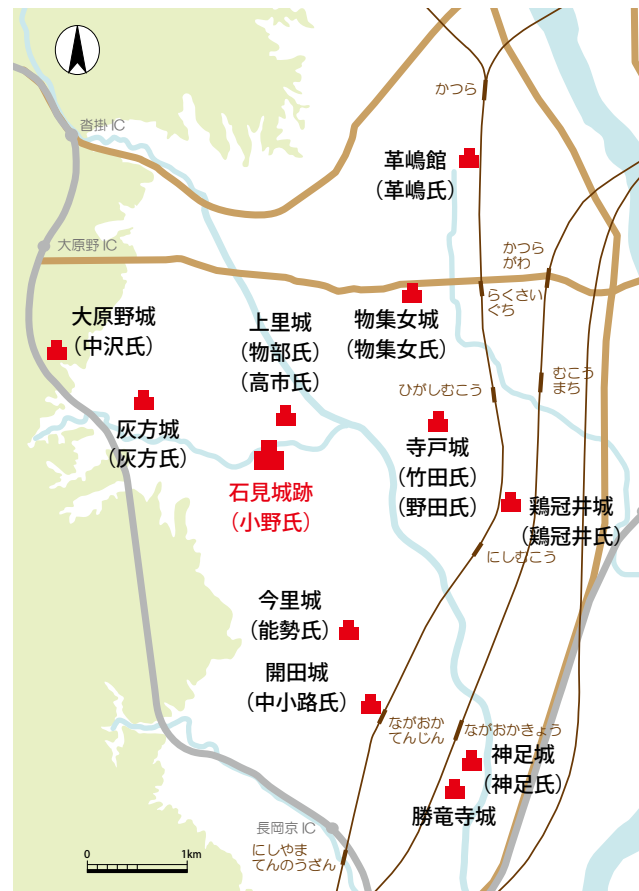


図2 西京区及び周辺市町の主な城跡

2. これまでの調査成果

平成16年度（2004）、都市計画道路「中山石見線」の建設に先立ち、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査をおこないました。その結果、鎌倉時代から室町時代（12～16世紀）の建物跡が多数発見されました。このうち室町時代前半（14～15世紀）の建物の主軸が、東側にある高まりや窪みの方向と揃うこと^{そろ}から、これらが石見城の土塁や堀である可能性が示されました。

令和2年度、京都市は西岡被官衆の城館の重要性を鑑み、石見城跡の調査を計画しました。まず地形の復元を試みるため、航空レーザー測量を実施しました。その結果、これまで竹林や草木のためよく分からなかった土塁状の高まりや堀状の落ち込みが、鮮明に浮かびあがりました。

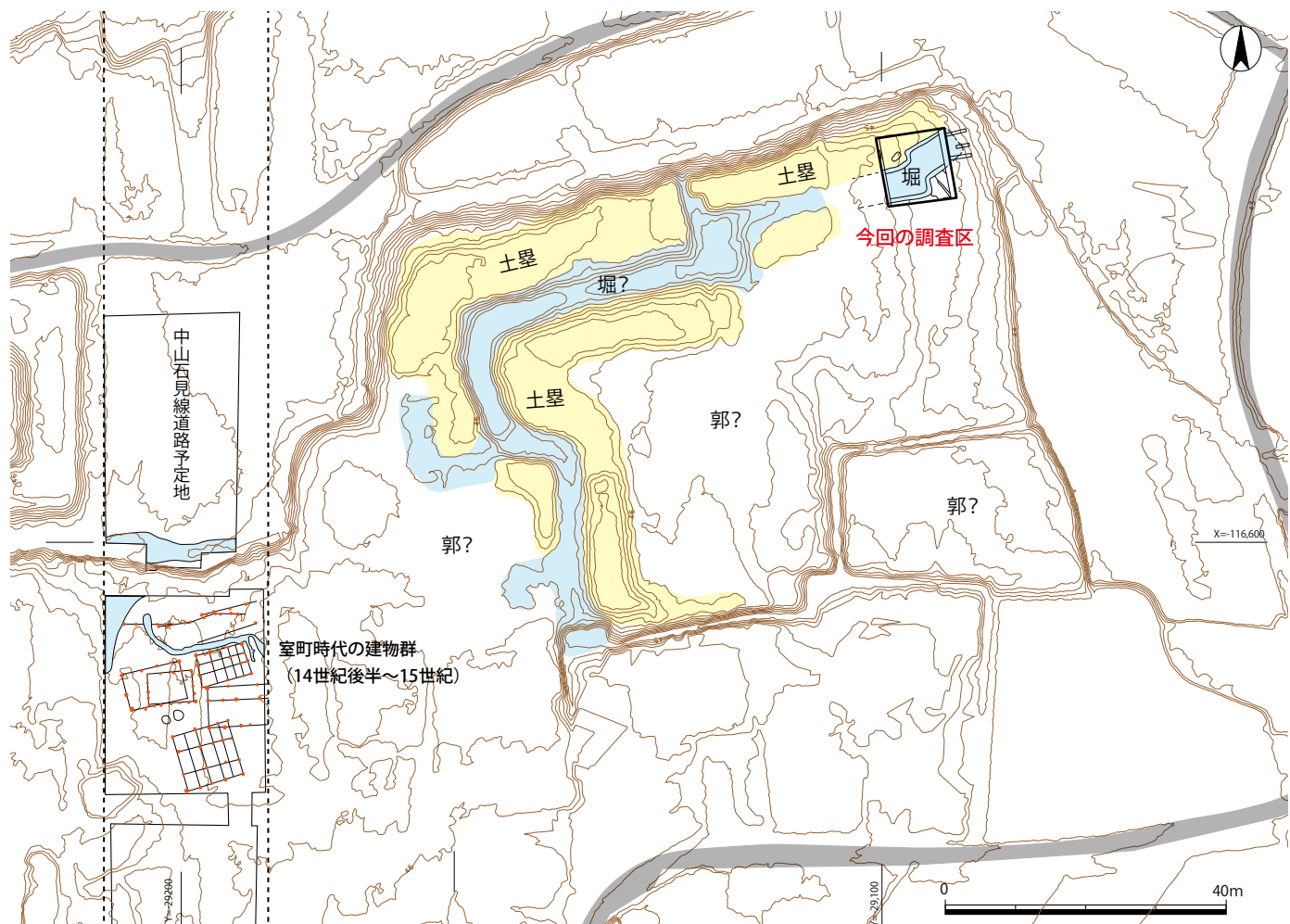


図3 調査成果接合図

3. 今回の発掘調査成果

今回の調査では、城の北東角に調査区を設定しました。その結果、地表面から30cmという非常に浅いところで、鎌倉時代～室町時代の遺構面を確認しました。

この面では、調査区の中央を東西にのびる大規模な溝状の遺構を発見しました。この遺構は最大幅5.5m、最大深度1.2mに及びます。掘削を進めたところ、調査区の中央付近で鉤形に屈曲し、東へ落ちる傾斜面付近まで続き、そこで閉じることがわかりました。明らかに人間の手が加えられた掘り込みであることがわかります。

なお、調査区の西側にはこれにつながる落ち込みがあり、連続する大溝（堀）となる可能性が高いと考えられます。